



Title	先達としての松田教授
Author(s)	高倉, 新一郎; TAKAKURA, S.
Citation	北海道大学農經會論叢, 15, 211-212
Issue Date	1959-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10782
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_p211-212.pdf



先達としての松田教授

高倉新一郎

松田教授は中学からの輝かしい先達である。たしか校旗の旗手であつた。この役は生徒の中でも余程希望のある秀才でなくては勤まらない。後輩の私にとつてはまぶしい位の存在だつた。そして大学に入つても、卒業して今もなおそうなのである。殊に若くして選ばれてロックフェラー財団により洋行し、アメリカに学び、更に独逸に学んで、音に聞く碩学につき農政学・経済学を充分に身につけて歸られたのは、此教室としては新渡戸博士以来の事ではなかつたかと思ふ。帰朝後アメリカのアグリカルチュアル・ラッター論をひつさげて、演壇に立たれた時は、まぶしさを通り越していた。間もなく教室の大先輩森本先生、ついで高岡先生が去られて、その重要なポストは二つとも教授の所に集つたのは当然だつた。教授は我々からすれば貪慾だと思われる様な広い視界をもつて、驚くばかりの語学の力を駆使して、常に新しい学説をとり入れ、紹介し、後輩を指導して、教室に新風を吹き送り、教室の大先達としての任を全うされて来た。私達は常にこの先達を仰ぎつつ、教えられ、励まされ、しかもその力の差を

嘆じて来た。ただ、非常に謙遜で、慎重な人柄であるために、極身近に接している人でないと、この恩恵に浴することが出来ないのは遺憾であるが、そのかわり、門下からは、有能の才が輩出している。眞の学府の責任者としてはかくあるのが当然ではないだろうか。送られる風が常に新しいために、今後進相寄つて、教授の在職三十五年を祝い記念論文集を刊行すると聞いても、私にはピッタリと来ない。こんなことに老い込む事なく、益々元気で、益々新風を吹き送つていただきたいと希望する。論文集刊行の趣旨はむしろ、これを望む声だと理解している。